



ほたるの森から

Messages from the HOTOARU's forest

編集/発行 守山市ほたるの森資料館

ゲンジボタルのふ化幼虫



ふ化後1週間の幼虫
(体長約 1.5mm)

カワニナの稚貝をねらう幼虫

2021・7・10 撮影

今年のゲンジボタルのふ化状況と今後の飼育予測

5月末から7月末まで、今年も資料館の飼育室で約5万頭の幼虫がふ化しました。まず、ふ化した幼虫の頭数を数えなければなりません。例年ですと計数しているうちにたくさんの幼虫が死んでしまいます。今年は効率的に短期間で計数作業を実施したため、幼虫たちをあまり死なせずに飼育水槽へ約4万頭を投入することができました。地球温暖化のため、この10年でふ化の時期はどんどん早くなっています。結果として、飼育する期間が長くとれるので、幼虫をより大きくできるという利点がありますが、逆に、ふ化が早まることで、早く終齢幼虫になった個体を放流時期まで長く維持管理しなければならないという問題も発生するのです。

ところで、8月14日から幼虫を飼育水槽から取り出して成長の度合いを調べはじめたところ、例年になく良好な結果がでました。この調子でカワニナがこの1年間を通じて順調に手に入れば、来年の飛翔数は今年度を超える好成績かもと期待しています。(F)

資料館のホタルとカワニナたち

5月末よりふ化したゲンジボタルの幼虫を22の水槽へ順次投入し、来年にむけて飼育を続けています。下の表は、ふ化幼虫を飼育して約2カ月後に調べた生育状況です。水槽ごとにより生育度や生存率に違いが出ており、何故これだけの差がでるのかを考えてみました。

飼育水槽のふ化幼虫には、投入した幼虫数だけ毎週カワニナの稚貝を給餌してきました。食欲があり早く成長した幼虫が、体長に合った大きさのカワニナの稚貝を食べると仮定すると、1頭当たり5~20個の稚貝を食べることになり、その結果、同じ水槽内で餌にありつけない小さな幼虫が発生し、結果的に成長せずに死んでしまう可能性があると思えます。遊磨正秀著「ホタルの水、人の水」には、ふ化直後の幼虫は無給餌の場合、平均で35.6日で死ぬと記されています。そこで令和4年度には、生存率をあげる実証実験として早めに給餌を開始しふ化幼虫数の2、3倍の稚貝を毎週給餌してみようと思っています。(K)



連続給水方式飼育水槽

真田館長のつづやき



ほたるの森資料館の役割

は、「ほたるの住むまち、ふるさと守山」をつくることです。まず、幼虫のえさの「カワニナ」の確保や水質等の維持管理に大変な労力を要してゲンジボタルを飼育し、ほたる河川への幼虫放流と市内の幼稚園や各種団体への幼虫提供をしています。また、市民啓発事業として、情報誌発行・出前講座・環境学習会などを実施し、地域の方々と「ホタルと環境とまちづくり」や「ホタルの自生に適する河川環境」について共に考え、行動することをめざしています。

観察してから放流しようね



本年度の環境学習会では、第1講が12月18日(土)守山市民ホール学習室で「守山のホタルって増えているの？それとも？」をテーマに、ホタル飛翔調査員の方々の報告を通して過去20年間調査結果からわかることについて話し合い、第2講では、来年1月22日(土)に同会場で「昨年、ホタルがあんなにたくさん飛んだのはなぜ？」をテーマに、吉身学区の事例報告から課題を考えたいと思います。是非ご参加下さい。(詳細は裏面で)

【表】

飼育水槽 No	初孵化日	初期幼虫 投入日	孵化幼虫 投入数	幼虫の大きさ別の生存数(頭)					全生存数 (頭)	生存率 (%)
				5mm以下	5~10mm	10~15mm	15~20mm	20~25mm		
1	5/21	6/24	1500	872	224	84	19	1	1200	80.0
2	5/23	6/24	1500	794	183	46	10	1	1034	68.9
3	5/18	6/25	1500	1006	277	32	0	0	1315	87.7